



(2000円)

特 許 願

昭和50年5月20日

特許庁長官 殿

1. 発明の名称 ウインドガラスの昇降案内装置

2. 発明者
東京都練馬区関町1-21
小 池 智 仁

3. 特許出願人
神奈川県横浜市神奈川区宝町二番地
399 日産自動車株式会社
代表者 岩 越 忠 忍

4. 代 理 人
東京都大田区山王2丁目1番8-17
山王アーバンライフ 317号・318号
〒143 電話 03 (775) 5391
6169 弁理士 石 戸

5. 添付書類の目録

- | | |
|-----------|-----|
| (1) 明 細 書 | 1 通 |
| (2) 図 面 | 1 通 |
| (3) 委 任 状 | 1 通 |
| (4) | 通 |



方式 (秘密)

① 日本国特許庁

公開特許公報

⑪特開昭 51-141123

⑬公開日 昭51.(1976)12.4

⑫特願昭 50-64522

⑭出願日 昭50.(1975)5.29

審査請求 有 (全4頁)

庁内整理番号

6948 36

⑮日本分類

80 B51

⑯ Int. Cl²

B60J 1/17

明 細 書

1. 発明の名称

ウインドウガラスの昇降案内装置

2. 特許請求の範囲

ウインドウガラスの下部に固定され、先端に球形部を有するアーム部材と、前記球形部を面接触により保持する少なくとも二つの保持片を有し、前記アーム部材に係止されたガイドローラと、前記ガイドローラと内側面において摺接し、ウインドウガラス収納パネル内でウインドウガラス昇降方向に延設されたガイドレールとを備え、ガイドローラとガイドレールとの摺動軌跡に対してアーム部材を摺動できるようにしたことを特徴とするウインドウガラスの昇降案内装置。

3. 発明の詳細な説明

本発明は自動車のウインドウガラス特にサッシュレスドア車のウインドウガラスに最適な昇降案内装置に関し、具体的にはウインドウガラスに取り付けられる昇降用ガイドローラと、これに対応して、ドアやサイドパネルに取り付けられるガイ

ドレールとを備える昇降案内装置の改良に関する。

サッシュレスドア車のドアウインドウガラス

(以下ガラスと称する)を例にとつて説明すると、

従来、ガラス1は第1図ないし第3図に例示するような昇降案内装置と窓外のウインドレギュレータ機構とによつて昇降されるようになっている。

すなわち、この昇降案内装置はガラス1にピンシヤフト2を介して取り付けられた樹脂製ガイドローラ3と、該ガイドローラ3に対応してドア本体DのインナーパネルD₁に上下方向に延在して取り付けられたチャンネル型のガイドレール4とから取り、前記ガイドローラ3の溝部3aとガイドレール4のチャンネル部4aとを摺動自在に接合してガラス1の昇降を案内するものである。なおガイドローラ3はピンシヤフト2に回転自在に取りつけたものとピンシヤフト2に固定したタイプのものがある。ところがこのような構成から成る従来の昇降案内装置では以下に述べる欠点がある。

(1) 前記溝部3aとチャンネル部4aとの接合部において隙間Rを大きくすると、ガラス1の閉防

力すなわちレギュレータ機構の操作力を小さくできるが、走行中のドア駆動やガラスノの昇降時のレギュレータ機構の操作によつてガラスノは第2図第3図Ⅰ-Ⅰ方向にガタついてしまう。このガタつきは車両の品質を著しく損なうばかりかガタつき音によつて乗員に不快感を与えてしまうものである。そこで、この隙間Rを小さくすればガタの発生はないが、レギュレータ機構の操作力が大きく速くなるため実用上困難である。

(2) また、高速走行時のガラス吸い出しによる吸い出し音を防止するため、ガラスノの軌跡に対し、ガイドレール4の軌跡が異なるように、ガラスノの曲率とガイドレール4の曲率とを積極的に非平行に設定した場合、両曲率が異なるため、ガラスノの全閉時におけるガイドレール4によるガラスノの支持性が向上して吸い出し音防止に効果を奏するが、ガラス昇降時における前記ステイツクの発生が極めて大きく、レギュレータ機構の操作性は著しく損なわれてしまうものであつた。しかも、ガイドローラ3が長期間の使用により摩耗し

てしまい、ガイドレール4との間でカタが発生してしまう恐れがあつた。

3. 従来ガラスノは第1図破線で示すように、年々此直線上下に直線的に昇降させているが、この場合、ドア本体Dを大きくしなければならぬばかりか、ドア本体Dに開設されたガラス進退用開口部も長くなり、前者においてはドア荷重が大きくなつてドア下りが発生して車両品質を低下させたり、ドアヒンジ(図示せず)を大荷重に耐えるものにならねばならず高価になつてしまう等の欠点がある。後者においてはドア剛性が低くなり、車両衝突時の乗員保護上の問題が発生したり、前記開口部のシール面が大きくなつて高価なものになつてしまう等の欠点がある。このため、第1図に二点鎖線で示すようにガイドレール4を車体長手方向に彎曲させ、ドア本体Dをある程度小さくし、ガラス進退用開口部を短くして開口部のシール面を短くし、ドア剛性を高めるようにしようとする。ガイドレール4の車体長手方向の彎曲形成により、ガイドレール4とガイドローラ3

との間の摺動抵抗が増し、レギュレータ機構の操作力が悪いものになつてしまうものである。

本発明はかかる従来の欠点に鑑み、ガラスのガタつきを防止して車両品質を向上させると共にガラスの昇降操作力を軽減し、ガラスの曲率とガイドレールの曲率が異なつても円滑なガラス昇降案内ができるようにした昇降案内装置を提供するものである。

以下図面により本発明を図面に示す実施例により従来と同一部分に同一符号を付して説明すれば次の通りである。第4図において、ガラスノの下部にブッシュ5、5を介してアーム部材6の一端に形成されたオネジ部6eがナット7と嵌合して固定され、アーム部材6の他端には球形部8が突設され、この球形部8にはガイドローラ9が揺動自在に係止している。すなわち、ガイドローラ9は指動子部10と係数個(図では二個)の抱持片11、12とから成り、指動子部10はドアインナーパネル1にガラスノの昇降方向に従設されたチャンネル型ガイドレール4の内側面4b、4bと接当す

る指動片10aと、ガイドレール4のチャンネル部4aの内面と接当するビード片10bと、ガイドレール4の内底面4cと接当するダンパー部材13の支持片10cとから成り、二つの抱持部11、12は球形部8と係止しているとき球形部8と大略合致する球状の内面11a、12aが形成され、常態にあつては二点鎖線で示すように弧状しており、球形部8が嵌入できるようになつており、球形部8と抱持部11、12との係止を保持するために両抱持部間にスプリング等の止部材14が介装されるようになっているものである。

かかる構成により、図外のウィンドウレギュレータ機構によりガラスノを昇降させると、ガラスノはガイドレール4とガイドローラ9が常に摺接しているのでガイドレール4の縦設軌跡に沿つて昇降案内されるわけである。このガラス昇降時、ガイドローラ9は指動片10aと、ビード片10b及びダンパー部材13を介してガイドレール4に接当しているので安定した昇降案内を行うものであり、他方、ガラスノに固定されたアーム部材6とカイ

ドローラ⁹とはいわゆる球面継手を形成している
のでアーム部材⁶がガイドローラ⁹に対して角度
 θ の軌曲で揺動可能である。

以上本発明によれば次に列挙する効果を奏する。

- (1) ガイドローラ⁹とガイドレール⁴とが常時接
当しているので、ガラス昇降時にカタついたり、
ステイックを起こしたりすることがない。すなわ
ち、ガイドローラ⁹は曲面⁸上 $X-Z$ 方向のカタは
指動片^{10a}により拘束し、 $Y-Y$ 方向のカタは一
方ではビード片^{10b}が、他方ではダンパー部材¹³
によつて拘束し、特に $Y-Y$ 方向はガラス¹の車
室内外方向の最もカタつきやすい方向であるが、
この方向に作用する振動やカタをダンパー部材¹³
が効果的に吸収するものである。
- (2) 高速走行時のガラス¹の脱出し防止のため
にガラス¹の昇降軌跡とガイドレール⁴の昇降軌
跡とが異なるようにガラス¹の曲率とガイドレ
ール⁴の曲率とを積極的に非平行に設定した場合、
アーム部材⁶が θ の軌曲で揺動自在であるため、
ガラス¹とガイドレール⁴との間の曲率変化分を

吸収でき、ウインドウレギュレータ機構の操作性
を損なうこともなければ、カタついたりすること
もない。すなわち、アーム部材⁶の先端に突設さ
れた球形部⁸とガイドローラ⁹の抱持部¹¹、¹²と
が面接触しており、接触面変化でアーム部材⁶が
角度 θ の軌曲内で自由に揺動できるので、ガラス
¹とガイドレール⁴との曲率が異なつても、ガイ
ドレール⁴とガイドローラ⁹との指接位置が常に
適正な位置に保持され、ガイドレール⁴の昇降軌
跡に沿つて球形部⁸と抱持部¹¹、¹²との接触面が
変化するだけでガイドレール⁴とガイドローラ⁹
との間の指動抵抗が増加することはない。ウイン
ドウレギュレータ機構の操作力を何ら増加させる
ものではなく、ステイックやカタが発生するもの
でもない。従つてウインドレギュレータ機構の操
作性は向上し、ガラス¹の昇降も円滑となる。

- (3) ガイドレール⁴の昇降軌跡を第¹図二点鎖線
で示すように車体長手方向に彎曲させて、ドア^D
の開口部を小さくしてドア剛性を保持すると共に、
シール面を少なくした場合、アーム部材⁶すなわ

ちガラス¹の角度 θ 軌曲内での自由な揺動により
ガイドレール⁴とガイドローラ⁹との間の指動抵
抗が増加することはない。ウインドウレギュレ
ータ機構の操作性を損なうことは全くない。

以上詳述したように本発明は実用上著しい効果
を発揮し得るものである。

なお、実施例はサッシュレスドアのウインドウ
ガラスにおける昇降案内装置について説明したが
ドアのみならず、車体リヤサイド部のリヤサイド
ウインドウガラスの昇降案内装置においても全く
同様に効果的であることは勿論である。またガイ
ドローラの抱持部は、2個に限らず3個以上でも
よい、更に抱持部を休止する止部材はエリングに
限らず、バンド式クランプでもよく、特に限定さ
れるものではない。更にまた、ガイドローラ、ダ
ンパー部材の材料は特に限定されるものではない
が、ガイドローラとしては硬質の樹脂製のものが
好ましく、ダンパー部材は少なくともガイドロー
ラの材料より可撓性に富むものが好ましい。

4 図面の簡単な説明

第¹図は自動車ドアの略示的側視図、第²図第
3図はそれぞれ従来例を示す第¹図Ⅱ-Ⅱ線、第
2図Ⅲ-Ⅲ線に沿う断面説明図、第⁴図は本発明
の一実施例を説明する第³図と同様断面説明図で
ある。

1……ウインドウガラス、D……ドア、4
……ガイドレール、6……アーム部材、8……
球形部、9……ガイドローラ、11、12……
抱持部、13……ダンパー部材。

代理人弁理士 石 戸



